

別紙1-1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 信太寿理

論文題目

青年期前期における母子の養育態度認知に関する研究

論文審査担当者

主 査

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 平石賢二

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 高井次郎

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 中谷素之

放送大学愛知学習センター所長・名古屋大学名誉教授 氏家達夫

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

本論文は、青年期前期、すなわち中学生年代の母子が認知する母親の養育態度に着目し、両者の認知的不一致が子どもの心理的適応やパーソナリティ発達とどのように関連しているのか検討している。また、養育態度に対する期待という新たな概念を導入し、期待と実際の2つの側面から母親の養育態度が与える影響について検討している。

養育態度に関する理論的基盤としては、この分野で今日においても多くの研究者によって支持されているバウムリンド (Baumrind, D.) の要求性と応答性からなる 2次元モデルを採用している。

本論文は、5章から構成されている。第1章では文献研究を行い、これまでの養育態度に関する理論、特にバウムリンドの理論とそれに関する実証的研究を紹介し、青年期を対象にした養育態度認知に関する研究において、母子のペアデータを用いて両者の認知的一致、不一致に着目することの重要性を述べている。また、養育態度の認知に関する研究において、実際の養育態度だけではなく期待の視点を取り入れることの意義を論じている。そして、養育態度認知に関連する要因として母親の共感性、自尊感情、青年の内的適応と性差について取りあげ、最後に本論文の目的と意義を論じている。

第2章では、バウムリンドが提唱した要求性と応答性の2次元モデルを測定する尺度を開発するために中学生とその母親を対象にした質問紙調査を行っている。そして、尺度の信頼性と基準関連妥当性、養育態度と母親の自尊感情、共感性、子どもの自尊感情、攻撃性との関連等を明らかにした。

第3章では、中学生の母子が抱えている母親の養育態度に関する期待と実際を測定するための尺度作成と、それを用いて測定された養育態度の期待と実際の一致・不一致のパターン、青年の内的適応指標との関連を検討している。その結果、要求性と応答性は共に実際と期待が両方高い場合に最も適応的であること等が明らかになった。

第4章では、特に期待に焦点をあて、中学生の母子の期待の高さが子どもの自尊感情と正の相関関係にあることを示している。また、性差の分析を行い、男子が認知している母親の応答性に対する期待は抑うつと不安に有意な負の相関があるが、女子の場合には無相関であるなど養育態度の期待と子どもの内的適応の関連における男女差を明らかにしている。

最後に第5章では、第2章から第4章までの結果を総括し、本研究において行われたバウムリンドの提唱した養育態度モデルに基づいた2次元養育態度尺度の開発、中学生の子どもと母親の養育態度に対する認知的不一致に着目する意義、期待の概念の重要性について論じている。また、母親の養育態度の先行要因としての共感性の機能、子どもの性別、養育態度が影響を及ぼす結果変数としての自尊感情、攻撃性、抑うつ、

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

特性不安の問題、などについて論じている。そして、最後に今後の研究の課題、展望として、子どもの自律性、不妊、親子の間主観性、弁証法的モデル、主体性と資源、父親の影響について触れている。

本論文の学術的意義と貢献について特に特筆すべき点としては以下の3点が挙げられる。

第一に、本論文では日本において初めてバウムリンドの理論に基づく母子の養育態度認知を測定するための尺度を開発し、その信頼性と妥当性を検証した点が挙げられる。今後は国内の他の研究者もこの尺度を使用することにより、海外の研究知見との比較や研究成果の蓄積が可能になると期待できる。

第二に、本論文では母子の二者関係をペアデータによって測定している点が長所として挙げられる。近年の親子関係研究においては、親子のペアデータを収集している研究も多くなってきているが、親子の認知的不一致を直接取りあげ、関係性の類型化を試みている研究はほとんど見られない。

第三に、養育態度研究において「期待」の概念を新たに導入した点が本論文における独自性として評価できる。従来の親子関係研究においては、子どもの行動や学業達成など親の子どもに対する期待に関する研究が殆どであり、親の養育態度に対する期待と実際という観点からのアプローチはなかった。子どもの親に対する期待は、養育態度以外の親行動全般においても重要であるため、この概念の今後の応用可能性についても評価できる。

以上の論文内容に対して、審査委員からは以下の疑問点、問題点が指摘された。

- 1) 本研究の理論的枠組みは古いのではないか。文化差を考慮した日本の養育態度理論は無いのか。また、父親の養育態度についても検討する必要があるのではないか。
- 2) 研究で取りあげられている概念が実際の測度と一致しているのか。母親の養育態度に対する母親自身の期待というのは何を意味するのかが分かりにくい。概念的な複雑さが生じている。
- 3) 養育態度の影響に関する理論的予測値をどのように考えていたか。今後は理論的な仮説モデルを検証するようなデザインと因果関係の分析を行う必要があるのではないか。
- 4) 因子分析の方法が研究毎に異なっている。親子の認知的一致、不一致という点では、探索的因子分析ではなく、確証的因子分析を試みる必要があったのではないか。
- 5) ペアデータの分析方法として、本論文で取りあげられた以外の方法、例えばペ

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

アワイズ・アプローチ、マルチレベル分析などができたのではないか。

以上の審査委員からの指摘に対して、博士学位請求者は問題点と解決方法をよく認識しており、今後の研究によって十分に対処していくことが可能であると判断した。また、質疑に対する応答も的確であり妥当なものであった。

以上の結果を総合し、審査委員は全員一致して、本論文を博士（心理学）の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。